

医療・福祉問題研究会会報

NO. 97
2010.6.30

医療・福祉問題研究会 2010 年度総会記念企画

日時： 7月24日（土）15時～17時半

会場： 金沢市松ヶ枝福祉館

テーマ： 『介護保険 10 年の検証』

報告者： 橋爪真奈美さん（石川県保険医協会）

黒岡有子さん（城北クリニック・介護相談センターふれあい）

曾我千春さん（星陵大学）

医療・福祉問題研究会 2010 年度総会記念企画として、介護保険法施行 10 年を検証します。一般的な言葉として「介護」や「介護保険」が定着し、人々の生活にも「介護」の必要な生活が浸透しつつあります。

介護保険は「介護の社会化」への国民の期待を背負って、一方では社会保障「構造改革」・社会福祉基礎構造改革のトップランナーとして、スタートを切りました。しかし、介護保険施行後、国民の期待を裏切るかのように深刻な問題が生じてきています。

市場化・営利化の進行から生じる人権にない手の変質、経済的な格差がもたらしたサービス利用者の格差、多様化が進む「高齢者の住まい」と「介護サービス」から生じる医療と介護の変質など、介護を必要とする人々とその家族、そしてにない手の人権侵害と深刻な問題は後を絶ちません。

今後、経済的な不安なく、だれもが安心して暮らし、いのちや健康を守るための社会保障のあり方について真剣にそして早急に改善を求める運動が必要です。

本企画では、現場からの声を中心に、この 10 年の検証を行い、真の介護保障についての議論を深めていきたいと思っております。

当日は、「医療・福祉研究」第 19 号をぜひお持ちなってお集まりください。多数のご参加をお待ちしております。

※ 当日、例会に先立ち 13 時から松ヶ枝福祉館にて事務局会議を開催します。
ご都合のつく方は、あわせてご参加ください。

医療・福祉問題研究会 総会のご案内

総会記念企画後に、2010年度医療・福祉問題研究会の総会を下記のとおり開催いたします。会員の皆様につきましては、ご出席のほどよろしくお願いいたします。

日時： 7月24日（土）13時半～14時半

会場： 金沢市松ヶ枝福祉館

- ▣ 2009年度の活動報告と2010年度の活動計画案
- ▣ 2009年度の決算報告と2010年度の予算案 など

事務局短信

懇親会のお知らせ

医療・福祉問題研究会総会記念企画の後は、恒例の懇親会を予定しています。多数のご参加をお待ちしております。

日時： 7月24日（土）18時～20時ごろ

場所： 菜香楼 TEL 076-221-3156

（金沢市武蔵町15-1 めいてつエムザ地下1階）

会費： 約4500円を予定

参加ご希望の方は、7月21日（水）までに下記までご連絡をお願い致します。

E-mail yyhms182@ybb.ne.jp （河野）

第99回例会報告(1)

『「医療」を考える ～半世紀の経験を振り返って～』

富家 貴子

私が筋先生を知ったのは、大阪の施設で働いていたとき、筋先生の本をたまたま買ったときでした。学生の頃から関心のあった平和問題について、就職後も組合の平和部員として取り組んでいた頃です。ですので、金沢に来て初めて筋先生にお会いしたとき、「今日の前にいる方があの本を書いた先生なのか」と驚いたことを今でも覚えています。

その筋先生の話を通じて直接聞くのは初めてでした。話を聞いて、医師として戦争犯罪に向き合い、そして患者にとって医療とは何かを追求する姿勢を貫き通されてきた先生の信条は、先生が診てきた多くの患者に支えられてきたものだということを知りました。

「医学」と「医療」の違いについても初めて知りました。いくら医学が進歩して、より精密な診断を行うことができたとしても、それが現場で「医療」として実際に行われなければ、本当に病気で苦しんでいる人に何もできないということです。この話を聞いて、「保険外診療」や「混合診療」の問題が頭の中に浮かびました。現在、国民健康保険料が払えず、医療機関にかかれず亡くなるという痛ましいことが起こっていますが、お金の有るなしで人の命が左右される事態が広がっています。私はつい制度上の問題点を考えてしまいがちなのですが、医師はこのような事態に対してどのような態度をとるのか問われているし、先生は医師として常に自問しておられるのだと思いました。

また、医師の戦争犯罪については、第二次世界大戦時、ドイツもT4作戦やユダヤ人への人体実験など行い、今ではかなり公になりました。しかし、日本の731部隊、別名「石井部隊」が行った人体実験は、日本の医学界では今でもタブー視されていることを初めて知りました。作家やジャーナリストが医師の戦争犯罪を取り上げることはありますが、一医師が、その属する医学界で、しかもタブー視されている中で異議を唱えることは、医師の世界がどのようになっているのか私はよく知りませんが、容易なことではないのだと思います。しかし、「過去に目を閉ざす者は、未来にも盲目となる」という有名な発言の通り、戦後多くの人々が薬害を被ったりしたことは、医学界が「過去に目を閉ざした」ことが大きな原因なのだと思います。

医師の患者となる私からみると、診療場面で出会う医師というのは「偉いなあ」と尊敬し、ときには偉そうなことを言われて腹が立つ存在なのですが、筋先生が取り組まれていることを果たしてどれほどの医師が医師として向き合っているのか、一患者として問うてみたいと思いました。



第99回例会報告(2)

『「医療」を考える ～半世紀の経験を振り返って～』 筒井 司郎(城北病院)

今回の例会は、研究会の創立メンバーの一人である昉昭三氏に医師としての自分史を語ってもらうことを通して、戦後医療の歴史・現代の課題について考えていくという、100回記念プレ企画として開催されました。

報告の第一の柱は、自らの医師としての50年「歩み」についてです。

医学者として公衆衛生の研究者を志しながら、社会問題への関心が膨らんでいき、それを決定的にした経験として、昭和20年代の「内灘闘争」について触れました。

太平洋戦争の悲惨な経験から、戦争はもうこりこりだという国民感情が渦巻いている中で、米軍の射撃場が自分たちの街に誘致されようとしている、それに対する怒りが、それまでは保守的だった20代、30代の母親たちを立ちあがらせ、地域の有力者も巻き込んだ一大運動へと発展していったこと、その巨大なエネルギーから学んだことなどについて触れられましたが、自らにとって何よりも大きなことは、この運動が契機となり、内灘診療所の所長として、本格的な臨床医の道を歩みだしたことのべられました。

臨床医あるいは診療所の責任者として、まず直面したのは、医療費の問題で、石川民医連の出発点というべき「しろがね診療所」では、受診者のおよそ半分が「私費患者」という無保険の状態でした。単純に社会保険の統計をみただけで、当時の医療の抱える問題点が浮き彫りになっているといえます。

次にポリオワクチンの輸入運動について、経験を語られ、より安全で有効性も高いと思われるポリオワクチンが、ソ連製という理由で、すんなり輸入が認められない、この状況を打破するために、全国のお母さんたちが立ち上がったこと、ここでも母親の力のすごさを痛感させられるとともに、「国民の医療要求」が「医療のあり方を変えていく」こと、「医学の進歩を医療の発展につなげていく」ことに確信をもつことができたと言われました。

そして70年代の「老人医療費の無料化」を求める運動でも、この信念のもとに運動に携わり、結果的に短期間で終わってしまったが、老人医療費の無料化を実現できたことや、それまでは、特定年齢で間引きして実施されていた、自治体の老人福祉法に基づく「高齢者検診」も一定年齢以上全員を対象にするものに変えていくことができたこと、を例にあげて、「医療・福祉こそが住民の選択する文化に他ならない」とここの発言を締めくくりました。

第二の柱は「患者と医師」の関わりについてです。

失業対策事業に携わる労働者の検診に関わることで、自分の病気、自分の身体について、本人が理解していないこと、医者への指示する「薬」は飲んで、生活環境の改善には積極的では無いことという現実から、「患者の理解なくしては、医療は成り立たな

い」ことを痛感させられたことを話され、患者自身が医療従事者と二人三脚で病気と向き合っていく「患者会」の組織に取り組んでいくことになります。

自分自身が責任者を務める病院において、高血圧の管理を目指す「会」を立ち上げたのを手始めに同僚の医師たちとともに、「糖尿病」「心臓病」の会を組織していきました。「医療とは、患者と医療従事者の共同の営み」であるというのが筋氏の持論の一つが生かされた「場面」といえます。

また、1980年代前半、全日本民主医療機関連合会の会長として、多額の負債を抱えて倒産状態に陥っていた山梨勤労者医療協会の再建に携わった時には、山梨県でも最新の設備をもった病院を経営する山梨勤医協がなぜ、ここまで経営悪化していったのか、経営陣の他事業への投資の失敗もあるかもしれないが、根本にある問題として、いたずらに高度な医療機器に頼り、医療の様々な場面において医療従事者と患者の申請関係の熟成を大切にしていこうを怠ってしまったのではないかと、しかも、これは山梨だけの問題ではなく、どこでも起こりうる問題として考えていかなければならないとのべられました。

最後の柱は、医師の人権意識と「責任」の問題についてでした。最近でも様々な「薬害」が大きな社会問題として取り上げられていますが、筋氏が直接的に関わることになった「スモン病」について、多くの医師・医療機関が実質的に加害者に立場立つことになってしまったが、残念なことは、少なくない医師が、この問題について自ら責任を「隠蔽」する側に回ってしまったことをあげ、この時に、医師・製薬会社も含め、日本の医療界全体が猛省の立場に立ったならば、その後の薬害問題を防ぐことができたのではないかと、少なくとも「肝炎」問題の様な、あそこまで多くの人々の人生を狂わせることは無かったのではないかと述べられました。

また、この問題をさかのぼっていくならば、医師の戦争責任にたどり着きます。筋氏が最近全力をあげて取り組んでいる課題でもありますが、悪名高い731部隊の人体実験に自らの知古のある人々が関わっていたことを知り、何度も中国に足を運び、現地の人々からの聞き取り調査を行うなどして、著作にまとめられています。これは過去の問題としておわらせてしまうことなく、未来への課題として医師をはじめ全ての医療従事者が人権意識を研ぎ澄ましていく教材としていかなければならないと思います。

報告の最後で筋氏は、医療・福祉問題研究会の活動について触れ、20年余り、よくがんばってきたという感想に触れた後、若い人々への期待として、この石川でどの様な医療・福祉を創っていくのか、「夢」をしっかりと描いてほしいと語り、報告を結ばれました。

当日は50名近い方に参加いただきました。報告者の筋昭三先生や司会を務めてくださった川合優氏はじめ裏方のみなさんご苦労様でした。